

2021年度第1回生物多様性の保全に向けたネットワーク会議 議事要旨

日 時：2021年8月26日（木）10:00～12:00

会 場：オンライン（zoom ウェビナー）

参加者：32名

内 容

●主催者あいさつ（環境局環境施策課長 三原眞）

生物多様性保全については、国内外の動向を注視し、新たな展開に対応していく所存。生物多様性保全は大阪市の地球温暖化対策とあわせ重要な取組の一つ。このネットワーク会議を通じパートナーシップの強化の下、3月に新たに策定した大阪市生物多様性戦略の4つの基本戦略、50の具体的施策に基づく取組を進めていく。

●区役所や図書館等と連携した情報発信の実施（環境局環境施策課長 三原眞）

生物多様性、大阪市生物多様性戦略の概略を説明。生物多様性の認知度向上のため、区役所、図書館における普及啓発・情報発信の取組が報告された。さらに、天王寺動物園や環境科学研究センター、長居植物園、中央図書館が主体となり取組を進めている事例について報告があった。

●基調講演：生きものにふれあえる公園（大阪府立大学 平井規央教授）

堺市WEBサイト「堺生きもの情報館」を通じて生きもの情報収集、生物多様性保全の普及を行っている事例を紹介。都市公園は市街地の中で重要な緑地であり、公園での観察に適したチョウ、バッタ、樹液食昆虫、外来種についてポイントを解説。公園での生きもの観察を通じ、都市域にありながら自然とふれあうことができ、時には希少種も見られる点や、外来種の啓発の場にもなるという側面についても指摘があった。

●報告：若者に向けた生物多様性保全活動の取組（大阪自然環境保全協会 秦野悠貴）

生物多様性保全を考えた場合、NPO・市民・行政の3者の連携が重要。市民活動に焦点を当てた場合、保全活動に従事する市民活動は重要な要素である。都市の中で生物多様性を保全するには、生きものの生息地となる都市公園が重要な役割を果たす。大阪城公園での活動を通じ、市民活動のこれからの課題として、主催者、参加者の高齢化が課題と指摘。若い世代における生物多様性という言葉の認知度は高いので、『認知』→『行動』へ移すためのきっかけづくりが必要であり、このきっかけづくりとして、スマホアプリによる生きもの観察が活用できると考える。

●報告：アプリを活用した生物多様性保全～AIを使った生物モニタリング手法の展望～（株式会社バイオーム 代表取締役 藤木庄五郎）

ボルネオ島での熱帯林にて調査・研究の後、(株)バイオームを設立して5年目。その経験から生物多様性保全の課題として、①経済性を持たせられていない（生物多様性がお金を生まない）、②データ不足により生物多様性を適切に評価できない（モニタリング手法の欠如）、③生物多様性への市民・企業の関心が薄いことを問題提起。①の経済性については、(株)バイオームでは資金調達法で生物多様性がビジネスになるようチャレンジ中。②のモニタリング手法については、全世界に40億台普及するスマートフォンの端末を生物分布の観測拠点にして、膨大な生物分布情報を取得する手法を確立。③の生物多様性へ

の関心については、アプリに「クエスト」というゲーム機能を持たせることにより企業・市民を巻き込むオンラインイベントを実施した事例について報告。

●意見交換会 テーマ「生きものにふれあえる大阪城公園をめざして」（進行：大阪自然環境保全協会 夏原由博）

テーマについて、公園管理者・公園利用者による意見交換を実施。

大阪城公園管理者 菅野浩一：2015年4月から大阪城公園の指定管理者となり、民間5社で公園管理を行っている。ウメ、モモ、サクラを中心とする公園樹木を管理しており、大阪城の西側は史跡エリア、東側は森が広がり都市公園の様相を呈している。大阪城は大阪市の観光拠点と位置づけられている。公園の管理にあたっては生物多様性にも配慮しており、草丈をひざ丈くらいに伸ばすとコオロギがみられたり、剪定枝をチップにしてまくとミミズが増え、ミミズを食べる鳥がやってくるなどの事例もある。野鳥の会大阪支部 松岡三紀夫：野鳥の会では、大阪城公園定例観察会を、1983年から毎月第4日曜日に実施している。観察会を通じて、鳥の数が減ってきているのを実感している。①冬場はエサが少ないのでミミズなどがいる落葉の清掃は3月以降にできないか、②下草を刈ると隠れ場所が無くなり、カラスなどに攻撃される鳥がいるため、隠れ場所を提供してほしい、③野鳥への餌付け禁止の看板の設置、の3点について公園管理者へ相談したいと考えている。

野鳥の会大阪支部 荒木涼子：大阪城公園は、歩きやすい、鳥を見つけやすいと初心者にも良い観察場所だが、マラソンなどの行事が多く、人出が多いと鳥が隠れてしまい観察しにくくなる。2020年春に中低木が切られ、鳥の隠れ家が減少した。石垣の清掃に関しても、コケ・クモなどの生きものにも配慮して実施していただきたい。大阪城は渡り鳥のルートになっているので、緑のボリュームを維持してほしい。

NACS-J 自然観察指導員大阪連絡会 垣井清澄：NACS-J 大阪連絡会での例年実施している大阪城公園での観察会について紹介。ウメ、モモ、サクラを大事にしている半面、商業施設建設に伴う伐採での緑の損失や、イベントの実施により生きものが住みにくくなることを危惧している。大阪城公園で実施している観察会などで得られる生きもの情報ははじめ大阪城公園において生物多様性に配慮した公園となるよう、公園管理にかかわる組織と公園利用者のコミュニケーションの場を作っていくことを提案したい。

大阪自然環境保全協会 夏原：意見を集約すると、大阪城公園における課題として、①生きものに配慮した公園管理の実施、②公園に関わる主体間のコミュニケーション不足が考えられる。

大阪城公園管理者 菅野：生物に配慮せず剪定をしているわけではなく、鳥も樹木も大切と考えている。剪定も植物の特性に配慮した時期に実施しているので公園で生きもの観察を行っている利用者の方々ともコミュニケーションを取りながら自然豊かな公園をめざしたい。

NACS-J 自然観察指導員大阪連絡会 垣井：我々のように生きもの観察をしているメンバーの数は限られているため、大阪城公園においてもバイオームを活用できると考える。バイオームにより生きもの情報が集約できれば、大阪城公園の生物多様性の状況がわかってくるとも考えられるため、公園管理に活用できるのではないかと。そういう場を作っていくのがネットワーク会議であると考えているため、環境局にお願いしたい。

大阪市環境局 三原：大阪市の生物多様性は、多様な主体との連携により成り立つものであり、パートナーシップのもと進めていく必要があることから、大阪城公園に関わりのある方々に参加いただき情報共有する場の提供を考えたい。また、あわせて大阪城公園にリクレーション目的で訪れる人たちにも生

物多様性に関する「気づき」を与えられるような取組も重要だと考える。

●質疑応答

質問1：バイオームをローカルの中で活用した事例はあるか。

(株)バイオーム 藤木：市単位、区単位での活用事例があり、十分に活用できる。

質問2：大阪城公園の年間管理計画は作成しないのか。

大阪城公園管理者 菅野：年間計画は、策定しており、それに従って作業をしている。生きもの・自然を学ぶ教育的なイベントも検討している。

●講評（大阪府立大学 平井規央教授）

本日の会議は、公園を利用する側と管理する側の両者の意見や課題が整理・共有された良い機会になった。生物に対する配慮に関しては、大阪市も含め生物情報共有し、利用者と管理者で綿密なコミュニケーションを取っていけば良いと思う。スマホアプリ・バイオームもうまく活用し、生物多様性保全の取組に活用していただきたい。

生物多様性のイベント企画の提案があったが、積極的に取り組んでいていただきたいと思う。情報共有や提案により有意義なディスカッションになった。